

# BCS

PRIZE-WINNING WORKS



BCS賞受賞作品探訪記

18

第三回受賞作品（一九九二年）

## 富山市民プラザ 前編

二四年前の一九八九年、北陸の歴史ある街の中心部に、富山市民プラザが誕生した。公的な複合文化施設の先駆けであり、市民が主役となって活用する場として親しまれている。前編は、この建築が計画された経緯と、どのような特徴と魅力をもっているのか紹介しよう。

### 市の中心部の活性化を図る 中核施設としてオープン

「富山市民プラザ」を巡るストーリーは、建物単体の設計や建設の話だけに留まらず、一九八〇年代に計画された富山市中心部の街づくり構想からスタートしている。JR富山駅から城址大通りを南に向かうと、県庁舎と市庁舎、オフィスビルが立ち並び、その向こうは城址公園。お堀に臨む富山城の天守がランドマークのように目に入り、現代の街並みの中に歴史を感じさせてくれる。さらに城址公園の南側が、古くからの市の中心部「大手町」である。明治期か

ら昭和期を通じて、官庁や警察、図書館、病院、保健所、公会堂などが入れ替わりながら建てられていたエリアで、江戸時代に富山城の大手門から出ていた通りが、城址公園の南辺のほぼセンターから南に伸びている。明治以降は「県庁通り」、戦後は「大手通り」と呼ばれていたという。また、この通りを進むと、「総曲輪通り」への入り口があり、ここから商店街が東に向かって続いていく。

八〇年代中頃、正橋止一市長のもと、二十一世紀に向かって、この大手町と総曲輪の一部を含むエリアの活性化を図るために再開発



市民プラザの外観には、内部のさまざまな施設の多様な表情が現れている。2009年に開業された路面電車・セントラムが大手モールを往く。(写真：山田新治郎)



竣工当時の富山市民プラザ。89年、市制100周年記念事業として、大手モールと共に整備された。



手前は城址公園。その中ほどをまっすぐに伸びる通りが大手モール。富山市民プラザを起点として再開発が行われ、99年に富山国際会議場(右)とホテル(左)が整備された。(提供: 株富山市民プラザ)



市がコンパクトな街づくりを進める一環として、2009年大手モールに路面電車・セントラムを導入。開業当日、富山市民プラザ前も賑わった。(提供: 株富山市民プラザ)

計画が始動した。このとき八六年に、具体的な街づくりの提案と、その後の設計・監理に携わったのが建築家・横文彦氏の率いる(株)横総合計画事務所である。

活性化が必要とされた背景は、富山駅周辺や郊外に商業施設が集まり、総曲輪通りを始めとする中心部の商店街に人が集まりにくくなっていったことに加え、大手町の公共施設の移転や建物の老朽化などで街の形もあいまいとなり、一帯が活気を失っていたことだった。横総合計画事務所の福永知義副所長が当時の提案について語る。



エントランスの左手から2階のガラスアートギャラリーや展示ギャラリーへ向かうエスプラナード。ゆったりとした共用空間が施設をつないでいる。(写真: 山田新治郎)

「大手通り幅二五メートルと広く、長さ約三〇〇メートル。お城のシルエツトを見通すことができ、景観的にも歴史的にもたいへん魅力のある場所でした。それを生かして、ヒューマンスケールの街並みとすること。また、市民病院の跡地に、活性化と街づくりの起点として、日常的に市民が集まってきて自分たちで活動できる新しいタイプの公共文化施設をつくることで賑わいをもたらし、商業の活性化にもつなげようと提案をしました」。これをもとに「大手モール」と複合文化施設「富山市民プラザ」が

スペースに大理石、ガラス、木などが床や壁に使われ、内外とも白いトーンで調和している。「デザインだけでなく、耐久性についても考えています。市民の方々が長く快適に利用できる場所でありたい」と福永氏。公共建築物のメンテナンスの必要性があまり意識されなかった時代に、地元の設計者と連携し、良好なメンテナンスを提供する関係をつくった。それが生かされ、富山市民プラザは多くの人々が親しむ場であり続けている。



富山市民プラザの中心に位置するアトリウム。屋内型の広場であり、エントランスロビーや屋外の前庭とともに、市民がさまざまなイベントに活用している。(写真: 山田新治郎)

つぐられ、八九年十二月にオープン。この建設は富山市制一〇〇周年記念事業の一つでもあった。

### 印象的な「都市の顔」の中に市民が活動する場をつくる

ゆったりとした大手モールの歩いでいくと、モールにつながるように前庭が広がる「富山市民プラザ」が迎えてくれる。さまざまな形状と高低が組み合わされた複雑な外観を見れば、ここには何があるのだろうと興味を湧いてくる。内部はじつに多様な用途の施設群がつくり込まれている。屋内型のイベントスペースとなるアトリウム、音楽のためのアンサンブルホール、マルチスタジオ、アートギャラリー、二五メートルのあるフットネススタジオなどの文化・スポーツ施設。市の公共施設である市民学習センター、公民館、市立外国語専門学校など。またレストランにカフェ、バラエティーに富む雑貨、ファッションなどのショップも入っている。これらをつないでいる階段や通路、スロープなど共用の移動経路はゆるりと開

放的で、目的の場所に行くまでに、まわりの光景が自然に目に入ってくる。まるで街を巡り歩くような感覚が楽しい。

### 高性能の施設設計と、美しく耐久性の高いデザイン

これらの施設群は、いずれも市民が集い、自分たちでやってみようことを実現する場として、手頃な規模に設定されているが、それぞれの性能は高い。たとえば音楽ホールは三〇八席と小ぶりだが、音響設計は充実しており、週末は市民の演奏発表会の予約で埋まっているという。その一方で、オープンな施設群を重ね、あるいは隣接させているため、音や振動が互いに影響しない設計が必要だった。遮音性能に配慮したり、防振性能を持つ二重箱のようなボックス・イン・ボックスの手法を使うなど工夫が凝らされた。仕上げ素材からもデザインの美しさを、心地よさが伝わってくる。外装にはアルミパネルや磁器タイル、コンクリート打ち放しと異なる表情の素材が、また内装は共用

### 設計者より

## 愛着をもって使われてこそ建物は長生きします



株式会社横総合計画事務所副所長 福永知義 Tomoyoshi Fukunaga

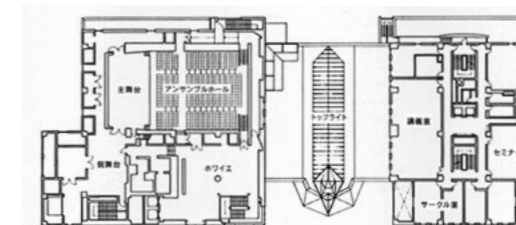
都市の中にヒューマンスケールの街づくりをしましょうという提案に至ったのは、横総合計画事務所発足の二年後の一九六七年以降継続していた代官山のヒルサイドテラスの計画や、都市型の複合文化施設として八五年に竣工したばかりだった青山通りのスパイラルの実績などがきっかけでした。複合文化施設はまだめずらしい時代でしたが、スパイラルは民間の建物ですが、公的につくられたのは富山市民プラザが全国で初めてです。建設と運営が第三セクター方式と

いうのも新しい試みでした。

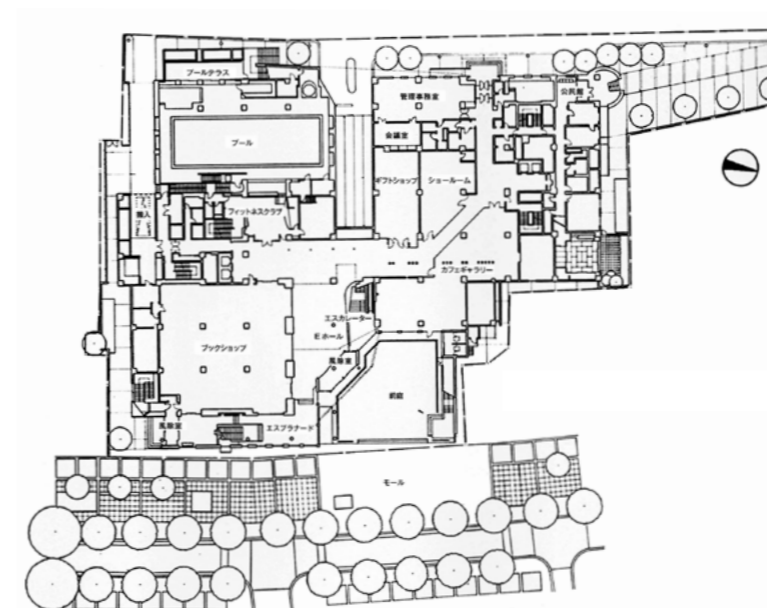
市民プラザの建物は活動を受け入れる耐用性のある器として、さまざまな使い方ができますし、市民の方々が主役ですから、使い方がどんどん変わっていくといいでしょう。市民プラザは、建物を長く使い続けるために、メンテナンスにも力を入れてくださっています。私たちは竣工後もメンテナンスに対応できるよう、建物の設計で協力していただいた地元の設計事務所の方にフォローしてもらっています。市民プラザの担当の方、そのほうが日常的な更新や問題を相談しやすく、動きやすいですから。特に新しい使い方をしたいといったときには、こちらに連絡をもらい、検討するなど、良い関係ができています。施工者の佐藤工業さんも積極的に協力してください。なによりも市民の方に長年使い続けていただいていることはうれしきことです。



断面図



4階平面図



配置・1階平面図



2階平面図

## 富山市民プラザ

JR富山駅より徒歩約15分。富山駅よりセントラムで約8分「大手モール」下車



### 計画概要

所在地：富山県富山市大手町6  
 建築主：株式会社富山市民プラザ  
 設計者：株式会社横総合計画事務所  
 施工者：佐藤工業株式会社、株式会社鴻池組、林建設工業株式会社、  
 日本海建興株式会社、近藤建設株式会社  
 竣工：1989年11月30日  
 敷地面積：6,002.69㎡  
 建築面積：4,283.47㎡  
 延床面積：22,702.30㎡  
 階数：地下2階、地上7階、塔屋3階  
 構造：鉄骨鉄筋コンクリート造、鉄筋コンクリート造、一部鉄骨造